

Paulo Nogueira Batista Junior
(Vice-president of the New Development Bank established by BRICS)
「BRICS の設立した新開発銀行の目的と今後の方針」

私は新開発銀行（The New Development Bank: 以下 NDB）についてお話をしたいと思えます。BRICS の国々でつくったものです。その本部は上海にあります。BRICS は皆さんご存じだと思いますが、ブラジル、ロシア、インド、中国、そして南アフリカです。私は今、上海に住んでおり、NDB の副総裁の一人です。その前は 8 年間ほど IMF の理事をしておりました。私の母国ブラジルとその他 IMF の国々を代表する理事としてワシントンの IMF に行く前は、大学で講師をしていました。

私が IMF にいたときには G20 のプロセスや BRICS のプロセスにも積極的に関わっておりました。BRICS という言葉は、ゴールドマンサックスのエコノミスト、ジム・オニール氏が創りだした、これらの国々の名前の頭文字を取ったものです。それが政治的な現実になったのはかなり後のことで、BRICS の国々が協働し始め、定期的にいろいろと会合を持つようになった 2008 年でした。

BRICS の協力関係

BRICS の国々の協力関係には二つの段階があったと思います。2008 年まで、それから 2011 年まで、そのころまでは BRICS は国際的なガバナンスに、G20 のプロセスや IMF の枠内で関わってきました。私たちは G20 のプロセスを去ったわけでもありませんし、IMF にもまだ入っています。しかし 2011 年から 2012 年ころ以降は、ワシントンの制度、あるいは国際的なガバナンスを変えていくという希望が、西側が支配的になっているために、2008 年の危機のころに私たちが期待していたよりも非常に低くなってしまったと BRICS は感じたのです。アメリカや欧州などの西側諸国が国際的なガバナンスに重要な変化をもたらさずであろうという約束をしてくれました。しかしその約束は実際には果たされませんでした。これは私個人の意見です。ですから BRICS は別の道を歩み始めたのです。

2012 年に、BRICS のリーダーたちはコンティンジェンシー・リザーブという制度と、BRICS の銀行をつくるということに積極的に動いていったわけです。そしてそれが今、上海にある NDB なのです。

本日私がお話しすることは、NDB の公式見解ではなくて、私見であることをまずお断りしたいと思います。

新開発銀行（The New Development Bank : NDB）の統治構造と AIIB との違い

まずは、NDB の統治構造を説明したいと思います。ある意味それはとても普通の伝統的な

構造です。まず、財務大臣で構成される理事会があります。それから、財務副大臣で構成される取締役会があります。彼らはしばしば会合を開きます。今年は7月と11月に開催していますし、次回は1月です。さらにマネジメントチームがあります。そのマネジメントチームはインド人の総裁と残り4か国からひとりずつ計4人の副総裁で構成されており、彼らは上海在勤です。そして現時点で約45名のスタッフがいます。この統治構造は5か国間での政治的な合意に基づき徐々につくられてきています。

5か国の政治的合意はいくつかの重要なことを規定しています。まずはそれらの点からご説明します。最初に、この5か国は均等出資をしており、同等な議決権を持っています。ブラジル、インド、ロシア、中国、南アフリカはそれぞれ20%の出資率、従って議決権も20%です。中国が上海に本部を持ち、初代の総裁は任期5年でインドです。次期の5年はブラジルが総裁になっていきます。このようにローテーションを組んでやっていきます。ロシアが理事会の会長を務めており、ブラジルが取締役会の会長をしています。南アフリカには上海の本部と同時に設立された最初の地域オフィスのヘッドクォーターがあります。

北京に本部があるAIIB、アジアインフラ投資銀行はNDBより少し後に設立されたのですが、最近メディアからより多くの注目を集めています。このAIIBとの比較をしますと、重要な違いというのは、まず、AIIBは本部が北京にあり、中国が支配的なメンバーであるということです。中国の出資比率は大体30%で、26%の議決権を持っており、銀行の重要な決定に関して拒否権も持つことになります。この点は、5つのメンバー国がイコールな権利を持つNDBとの大きな違いです。

二つ目の重要な違いは、AIIBはNDBとは異なる経路で設立されたことです。中国がAIIBの合意覚書が実際に交渉され、締結される前から、メンバーシップをオープンにしており、アジアに焦点を当てた銀行であるにも関わらず、アジア以外の国々にもオープンにし、そこで57か国という多数の創設メンバーで設立したことです。たとえばブラジルも3パーセントの資金を持ってAIIBのメンバーに入っていますし、ヨーロッパの国々も入っていますが、それはNDBが取ったアプローチとは全然違います。私たちの場合には5か国で始めて、交渉を通して合意覚書を作成し、完成させ、2014年半ばに署名するというステップを踏んできました。

三つ目の違いは、AIIBが本質的にアジアの銀行ならば、基本的にアジアにおいてその業務をやることになるでしょう。一方、NDBの場合には、貸し出しもいろいろな業務も世界のすべての地域が対象であるということです。

私たちNDBは、新聞ではしばしばBRICS銀行といわれておりますが、本当の正式な名前は新開発銀行(The New Development Bank)です。設立前の交渉時にBRICS銀行と呼ばれるのを、私たちは意図的に避けました。というのは、この銀行はオープンだということ、他の国連の加盟国ならどこでも入れるということ、そういうメッセージを伝えなかったからです。将来メンバーシップはオープンにするが、しかし、その前にいくつかのステップを踏むべきだと決めたのです。これはAIIBがとったやり方と全く異なります。私たちは2012年から2014年にかけて、合意覚書の交渉をしました。そして基本条約が、2014年7月のブラジルのフォルタレザでのBRICSサミットにおいて署名されました。第二のステップとし

て、5 か国で合意を批准しました。インドだけは国会での批准は必要なかったのですが、他の4 か国は皆国会での批准が必要であり、今年の6 月までにすべて批准されました。

そして、7 月にマネジメントチーム、総裁と4 人の副総裁が上海に移りました。もう本当にゼロからのスタートでした。非常にしっかりとした構造を持った、というより、しっかりし過ぎているようなワシントンの IMF から、私は上海へ移って来たわけで、上海へ移って最初の1、2 か月は変化に対応するのに大変でした。それでも前へ進めるため、最初のスタッフを集め、私たちの当初の政策の枠組みを明確にしました。それは今もやっていることです。私たちのインドの総裁は、最初の業務を、おそらくそれぞれの国の一つか二つのプロジェクトを来年の第2 四半期から始めたいと言っています。このようにステップ・バイ・ステップで前進しています。

こうしたすべてのステップを完了した後、初めてガバナンスボードで新しいメンバーについて参加させるかどうかという手続きについて決定します。この合意書の条項に基づいてメンバーは2 種類あります。非借入れメンバーの先進国と借入れメンバーの新興国や開発途上国です。合意条項に基づき日本も NDB の非借入れメンバーとして参加資格があります。日本の場合、AIIB への参加には消極的だったと理解しています。その立場が将来的に変わり、両方の銀行の参加国、加盟国となるかもしれません。

また、先ほど申し上げましたが、NDB は国連加盟国すべてに対してメンバーシップが開かれているという意味では、BRICS 銀行と呼ぶのは不適當かもしれません。しかしながら、別の意味において BRICS 銀行でもあるのです。というのも、合意では、かなり厳しくガバナンスについて規定しているからです。例えば、創設5 か国の議決権は全体の55%より下回ってはいけません。また、非借入れ国メンバーは、全体として議決権を20%を超えて持つことはできない。さらに、BRICS の5 か国以外のメンバー国は、一国としての議決権を7%を超えて持つことはできない。これは創設国に対しての議決権を守り、また先進国に対する議決権を制限しようという意図です。これはある意味、私たちの保証のようなものです。NDB はグローバルな機関として初めて設立されるわけです。そしてグローバルな規模で、新興国だけでこういった機関をつくるというのはこれまで経験がありません。さまざまな影響力のある国の声、存在に対しての懸念があり、こういった形になっています。

また、この銀行は BRICS 銀行と呼ぶのにふさわしいという意味では、これは合意にはありませんが、採用方針として、BRICS 諸国の出身者の採用を優先します。ただ、少なくとも初期段階では、特殊な資格が必要とされるようなポストに対しては、例外として非 BRICS 国の出身者を採用することもあります。また、BRICS 国以外からのコンサルタントなどの参加もあります。

新開発銀行のマンデート

では、NDB のマンデート、使命は何なのかということですがけれども、AIIB と比べてみましょう。AIIB はまさにその名のとおりインフラストラクチャーのみに焦点を当てています。しかしながら、一方の NDB はダブルマンデートということで、インフラと持続可能なグリ

ーンな開発を目指しており、地理的のみならず、追求するテーマでも AIIB とは違います。ただし、世界銀行のマンデートよりは大きかりものでなく広範なものでもありません。というのも、例えばクライアントの政策への関与であったり、あるいは融資条件を付けたり、研究調査活動に対しての融資などは行いません。ワシントンの国際機関が開発途上国と交渉する際に悩まされるいわゆるメサイアコンプレックスというものを、私たちは避けたいと思ってきました。私たちはもっと謙虚でありたいと。どんな国に対しても政策を指図したり、かれらの政策に干渉したりはしなつもりです。そうではなくて、インフラストラクチャーや持続可能な開発計画のプロジェクトの価値を評価していくのです。これはワシントンの国際機関とは全く異なるアプローチです。

この BRICS 銀行、NDB は国際ガバナンス構造に対する挑戦なのかと、私はよく尋ねられるのですが、私の答えはノーです。合意文書を見ていただければ、規約でもこの銀行は既存の機関体制の補完として設立されています。つまり、世界銀行、アジア開発銀行 (Asian Development Bank: ADB) や AIIB などの多国籍な開発銀行と協力し、協業することが目的です。というのも、BRICS の各国にはインドを除き、非常に重要で強力な国内の開発銀行があります。ブラジル、中国、ロシアは特にそうです。ですから、そういった国内の開発銀行とも協力をしています。

私はおとといブラジルの国立開発銀行のメンバーと上海で長い間会議をしていました。そして、合意覚書も交わしました。また、世界銀行の代表者団からも訪問を受け、2 日間にわたり世界銀行の方針について説明を受けました。そしてどのようにしたらうまく機能するのかを協議しています。つまり、これは決して既存の国際機関や制度を損ねたり、それらに対抗しようというものではありません。しかし、そうは言ってもはっきりしているのは、もし国際的な金融機関あるいはワシントンに拠点を置く国際機関が、現状よりももっと変化に敏感で、対応する用意が出来ていたならば、恐らく BRICS 諸国は、わざわざ自分たちの開発銀行やそれと同時に設立された自分たちの金融基金を設立しようとはしなかったでしょう。IMF や世界銀行などがより迅速に変化に対応していれば、ここまではやらなかったと思います。つまり、こういった BRICS 国自身の銀行や基金の設立が発案されてきた背景にあるのは、既存の国際的ガバナンス構造の中には新興国や開発途上国の居場所がないということです。本日のモデレーターを務められている小手川さんと私は、経済危機のさなかに IMF の理事会にいました。私のほうがより長く残っていたのですけれども、あの危機のさなかにあって、当時私たちが受けた印象は、変革していくのだという意志がワシントンにあったということです。しかし、その後、北大西洋各地域での危機感が薄れるとともにその変革の必要性の認識も薄れてきました。ですから、これは前言の繰り返しになりますが、NDB は補完的な存在なのです。AIIB、NDB とワシントンに本部を置く既存の国際機関の間には、競争的かつ協力的な関係があるのです。

いずれにせよ、率直にオープンに申し上げますが、NDB の規模は、たとえ AIIB と合わせたとしても決して大きくないのです。国際金融ガバナンスの景観を一変してしまうほどではない。たとえば、NDB の授権資本は 1000 億ドルで、応募資本が 500 億ドル、また、請求払資本は 100 億ドルです。私たちは高いレバレッジで運用ができますが、それ自身で大き

な変化を景観にもたらすほどの大きさではありません。

また、私たちは軽視できない特殊な課題にも直面しています。新興国、開発途上国が自分たち自身の力でグローバルな使命を受けて立とうということで初めて設立した機関です。まだまだ学ぶべきことがあり、経験も浅いので、他の国際機関からいろいろ学びたいと考えています。それによって開発途上国がインフラあるいは持続可能な開発において抱えている問題の解決の一助として貢献したいと考えております。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

(了)